

愛媛果研ニュース

No.30 平成24年8月



収穫時期の「愛媛果試第28号」(紅まどんな)

折からロンドンオリンピック開催中、日本選手の活躍ぶりと連日のメダル獲得報道に一喜一憂し、数々の感動をもらっている。選手のインタビューでは満足した顔、不本意であった顔様々であるが、一朝一夕になしえた結果ではなく、その過程を知るにつけ受ける感動はいつそう大きくなる。

立秋も過ぎ、モモ、ブドウ、ナシなどの果実が店頭を賑わし始め、前半の日照不足から果実は小玉傾向ではあるが、味は良い。柑橘類も7月末時点では小玉傾向であるが、果汁は糖高・酸低であり、今年は美味しい果実の仕上がりに期待が膨らむ。今後の仕上げ摘果やマルチ被覆、病虫害防除など諸作業の励行によって日本一の果実を消費者に届け、金メダルをいただきたいものである。

さて、平成23年3月に新しい愛媛県果樹農業振興計画が策定され、県外産地との競争力を高めるため、多様な消費者ニーズに応える産地供給力の強化を図るとともに、省力・低コスト化を目指した基盤整備、県産果実の消費拡大や多様な流通販売形態への対応促進など今後10年間の方向性が示されている。これを受け、果樹研究センター・みかん研究所では「柑橘やキウイフルーツなどの新しい品種、栽培技術等の開発」、「作業の省力化や温暖化等に対応した栽培技術の開発」、「果実の出荷、流通改善や加工に関わる技術開発」を大きな柱として研究に取り組んでいる。

その中で今回は、①県オリジナル品種として生産量が急速に伸び、年末贈答商材として期待の大きい「愛媛果試第28号」(紅まどんな)の加温ハウス栽培、②温暖化により産地化が進むブラッドオレンジの機能性評価、「タロッコ」の果汁成分と抗酸化能について、③減農薬や有機栽培の進み具合を客観的、科学的に評価する方法を検討した天敵類を利用したカンキツ園の生物多様性の評価の3題を掲載した。研究途中ではあるが、今後の果樹栽培の一助になればと願っている。